# 2010年度 モンゴル・スタディツアー参加者報告

日本ユニセフ協会 学校事業部は、カンボジアとモンゴルを対象にした指定募金事業を行い、支援を続けています。毎年、支援国の子どもの状況や事業の取り組みを先生方に視察していただき、学校や地域での学習や広報活動に役立てていただいています。今回、2010 年度のモンゴル・スタディツアーに参加された小学校の先生の感想とその後の学校での意欲的な取り組みをご紹介いたします。

©日本ユニセフ協会
スタディツアー参加者

| | |
|---|---|
| 日程 | 2010 年7月 25 日(日)～8月1日(日) |
| 日本ユニセフ協会が支援する事業 | 遊牧民の子どもは、教育の機会を持てず、栄養や健康の面でも十分なケアを受けられていない。こうした子どもたちの状況を把握し、状況に合わせた子どもたちの栄養、保健、幼稚園教育の改善を進めている。 |
| 視察概要 | ①遊牧民を対象とした移動式幼稚園の活動<br>②厳しい状況下にあって、保護を必要とする子どもに対する支援活動<br>③郊外のゲル地区の劣悪な環境のもとで生活する元遊牧民に対する支援活動 |

## 神奈川県藤沢市立善行小学校

教諭 佐藤大輔

### 視察の動機

日本では当たり前のようにある食べ物や飲み物。また、学校に行けない子どもはいない。子どもたちは、他の国でも同じように生活していると思っている。そこで、十分な生活ができなかったり教育を受けられなかったりしている子どもがいる現状を、実際に自分自身が感じ、伝えたいと思った。また、多くの方々と触れ合う機会となるこのツアーに魅力を感じていた。さらに、モンゴルの教育や人々とふれあい、学んだことを今後の教育活動に活かしていきたいと考えた。

©日本ユニセフ協会
ゲル地区

### 視察の感想

モンゴルのことわざに「千回聞くより，一回見ろ」という言葉がある。ユニセフ募金は、どのように使われているのか、実際に自分の目で見て、確かめて子どもたちに伝えたいという思いで、このツアーに参加した。

©日本ユニセフ協会
水を運ぶ少年

ウランバートルの町は、想像と違って大きなビルや店が立ち並んでいた。モンゴルのイメージは、「スーホの白い馬」のどこまでも広がる草原であったが、ここ数年経済成長を続けるモンゴルの片鱗を見ることができた。ウランバートルを少し外れたところに広がっていたのは、所狭しとゲルが立ち並ぶゲル地区であった。ここは、家畜を失った遊牧民が職を求めて移り住んでいて、その数は年々増えてきている。モンゴルには土地所有という概念がなく、家を建てて住めばそこが自分の家といった現状がある。そのため、川や高圧電線の近くなど安全ではない場所にゲルを建てることもあり、問題になっている。

モンゴルで最も重要視されているのは、水と衛生である。ゲル地区には水道が通っていない。そのため、地域住民は「ウォーターキオスク」と呼ばれる簡易給水施設から水を買って生活をしている。幼い子どもが、30kg近くになるタンクを何度も運んでいる姿には驚かされたが、ユニセフなどの支援によって「ウォーターキオスク」が年々増えてきている。以前は1kmの距離を運んでいたが、今では500m程度ですむようになった。日本では水道の蛇口をひねれば、当たり前のように出てくる水を手に入れるのが大変であることを実感した。